

## 令和4年度 研究概要

<p>所属名</p> <p>カリキュラムセンター</p>	<p>研究会議名</p> <p>高校教育研究会議</p>
<p>研究主題</p>	<p>疑問をもち、解決に向かって学ぶ生徒の育成 ～問題の工夫から学習過程が充実していく指導を通して～</p>
<p>資質・能力 育成を目指す</p>	<p>疑問をもち、解決に向かって学ぶ力</p>
<p>研究内容</p>	<p>平成30年3月に告示された高等学校学習指導要領が、令和4年度から年次進行で実施されている。今回の学習指導要領では、各教科等の目標及び内容が、育成を目指す資質・能力の3つの柱に沿って再整理され、主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善を通じた学習過程の充実によって資質・能力を育成していくことが求められている。学習過程の充実とは、学習の中で生徒が「なぜ」と疑問をもち、筋道を立てて解決していくために、授業のねらいにせまるような試行錯誤を行うことと捉える。しかし、本市、「市立高等学校改革推進計画第2次計画」では、教育活動が知識の暗記・再生に偏りがちと述べられていたり、研究会議で行った調査では、「問題の解き方は先生から与えられるものだ」という質問に対してそう思う、ややそう思うと回答した生徒の割合は約7割であったりと、指導されたことを暗記・再生するような学習が多く見られ、学習過程を充実させるような指導が不足していることが課題であると考えた。</p> <p>本研究会議では、与えられた問題に対して、授業のねらいにせまるような「どうして」や「どのように」を自ら考え、疑問が自分事となることで、学習過程が充実していくと捉えた。学習を自分事として捉えることが十分でなければ、解決したいという意欲につながらないと考えたからである。問題とは、教師が授業の主に冒頭部分で扱う教師から生徒に与えるものを指す。教師が問題を工夫したり、発問を工夫したり、授業展開を工夫したりする指導がなされることによって学習過程の充実につながると考えるが、本研究会議では、生徒が問題をより自分事として捉えられるような問題の工夫を行い、「疑問をもち解決に向かって学ぶ」生徒の育成に取り組む。問題に焦点を当てるのは、学習過程を重視する指導を提案している相馬（1983）らは、「カギを握るのは問題」と述べており、問題によって生徒の疑問を促せるかどうかが大きく変わるからである。工夫とは、誤答をあらかじめ示し修正箇所を考えたり、条件不足の例を示し何が足りないか考えたりする問題等を取り入れることである。こういった工夫は、授業のねらいにせまるような疑問を見出しやすいと考える。また、「疑問をもち、解決に向かって学ぶ」力は、本市総合教育センターが目指す「自己実現を図り、持続可能な社会を創る資質・能力」にもつながると考える。新しい知識を習得したり、活用したりする際に、新たな問いに対して「なぜ」と考えることで、思考力を働かせられるようになり、その思考力が目指す資質・能力の育成に寄与すると捉えるからである。</p> <p>本研究会議では、学習過程が充実するような問題の工夫例を示すとともに、研究を通して「問題の解き方は先生から与えられるものだ」と捉えるような生徒が、どのように変容し、「疑問をもち解決に向かって学ぶ」姿につながったかを明らかにする。</p>